

フンシャー
利子論

重勘賀氣
三健賀氣 訳

〔訳者略歴〕

気賀勘重 (きが かんじゅう)

明治6年 静岡県に生まれる

明治28年 慶應義塾大学文学科卒業、ドイツに留学し Ph. D. の学位を得る。慶應大学教授として活躍、衆議院議員当選1回、法学博士、農業問題の権威として名声があった。

昭和19年 没

〈おもな訳書〉

フィリップ・ヴィーチ著『経済理論』『経済政策』同文館

アダム・スミス著『国富論』上巻 岩波書店

気賀健三 (きが けんぞう)

明治41年 勘三の第三子として東京に生まれる

昭和5年 慶應義塾大学経済学部卒業、同大学助手を経て教授となり、49年同大学定年退職、成城大学教授となり、現在、桑沢学園理事長

〈おもな著書〉

『経済政策の根本問題』有斐閣

『共産主義の経済』塙書房

『民主的労働運動の経済学』社労研

近代経済学古典選集—12

フィッシャー 利子論

昭和55年12月10日 発行

定価 7800円

検 省
印 略

訳 者 気賀 勘 重

気賀 健 三

発行者 引 地 正

印刷所 太 平 印 刷 社

発行所 (株) 日本経済評論社

〒101 東京都千代田区神田神保町 3-2

電話03(230)1661(代)・振替東京3-157198

原著者序言

世界大戦中およびその後において、軍事的活動ならびに戦後の賠償、復興および商工業の再建に資金を供給せんがために生じたすさまじい信用の膨張は、幾多の実業家の心裡にはもちろん、多数の経済学者にも、資本主義および利子の性質ならびに本源に関する諸問題を新たによみがえらしめるに至った。したがって本書は、金融上、産業上の指導者および経済学の教授、学生のために記述されたものである。

大戦中ならびにその後における通貨の膨張はドイツその他の諸国において、物価を昂騰せしめ、実質上の利子歩合をば零よりはるかに以下に低落せしめ、かくして、数百万の投資家を貧困に陥らしめた。いずれの国においても収益の確定せる一流証券は、実質的利子歩合に及ばず通貨の変動の影響のために著しく投機的なものとなった。大戦後において、消費せんがために借入によって将来所得を前もって取得せんとする人民全体の翹望は、投資によって多大の収益を獲得せんとする機会と相ならんで、利子歩合を上げかつこれを高度に維持した。国民所得の増大は合衆国をして債権国たらしめた。国内においては、科学上、工業上ならびに農業上の新しい革命のために実質的所得が驚くべき程増大した。利子歩合は、1920年以来やや低落したが、投資に対する収益が依然として高いためになお高率である、消費の翹望は、割賦販売に適応しかつこれを刺激するため、ならびに消費を標準化しかつ安定せしめるために特に組織された所の金融会社の形式を取る消費信用の組織によってその実例が示されるに至った。

本著 *The Theory of Interest* は、さきに1907年に出版され、その後久しく

原著者序言

絶版となっていた所の The Rate of Interest の修正として企てられたものである。該書物の続版に対する要求はしばしば起こったのであるが、私は年1年と、20年以上にわたってこれを延期して来た。その訳は外でもない、私は表現法を修正し、そして批評から判断して、了解されていないと考えられる部分を書直さんと欲したが故である。

私は、私の気が付いた所の前著に対する幾多の批評を考慮し、その結果として表現の形式を著しく変更した。実質においては、私の利子論はほとんど全く変更されていないけれども、その叙述はこれを大いに拡充しかつ書直しを行った。故に、私は、この著が私の最初の著書を誤解せる読者に取って私の考えているよりもはるかに一層多大の変更を受けたかのごとく考えるであろうと予期する。この結果は、すなわち若干の新材料を附加して、旧著を完全に書直せる新著 The Theory of Interest となったのである。

私は種々なる経済学者ならびに指導的の実業家および特に、ベルサイユ平和会議におけるイギリスの代表者の一人オスワルド・ティー・フォーク氏 (Oswald T. Falk) によって、利子論のこの新記述を書著すことをすすめられた。同氏は、氏が、それ以外のいかなる著書よりも The Rate of Interest によって経済理論に対する一層深奥なる理解を得たことを親切にも語ってくれたのである。

The Rate of Interest 公刊後数年に至って、私は、「割増」または時差という言葉の代わりに一層通俗的な「翹望」という用語を用いることを主張した。この標語はその後広く一般に採用せられ、ついには私が生産力または投資機会の方面を全然看過しまたは無視したという誤った印象を普及するに至らしめたことは、私の吃驚する所となった。それのみならずこの新語は幾多の人々をして翹望なる新語を用いることによって、私が一つの新しい考えを主張せんとするかのごとく考えさせるに至った。かくて私は翹望説の創始者でないのに、そうであると思われ、そしてこのような標語を欠いている部分の創始者であると考えられぬことになったのである。さきに多くの研究の後、私が、すこぶる

原著者序言

一般的に用いられていた所の「生産力」という不適当な用語の代わりに「投資機会」という標語を採用するに至ったのは実にこの誤解のためだったのである¹⁾。

- 1) この投資機会という用語は本書に用いられている所の技術的大いさ r を暗示または表示するために、通俗語の中で最も適切な表現であると思う。 r を詳しく言い表わせば、費用以上の収益の率である。そして費用も収益も共に選択自由なる二つの所得の流れの間の差異である。私の知る限りでは、幾多の所得の流れとその間の差異すなわち費用以上の収益の年々の比率を利用せる利子論の著者は外に一人もいない。この用法に最も接近しているものは、ハーバート・デーブンポート (Herbert J. Davenport) 教授の諸著作、殊にその *Economics of Enterprise* (Macmillan, New York, 1913) 368・379・381・394・395・396・410・411 の諸頁にあるように思われる。

経済学においては、独創性を証明することは困難である。なぜかという、あらゆる新思想の芽は確かにかなり往時の著書に繰返し繰返しこれを見ることができるからである。私自身としては、私の結論が真理として承認せられさえずればたとえその起源がこの批評家によって全然往時の著者に帰せらるべきであるとされても満足するものである。私はある程度の独創性が私に帰せられんことを希望しているが、この問題に関する周到なる研究者はいずれも皆、利子論の私の取扱方の中に研究者自身の特徴のあることを認めるであろう。私自身の学説はある程度まであらゆる人の学説である。私の学説の本質的な部分はすべて皆少なくとも1834年においてジョン・レーによって前もって著されているのである。

もしも、「翹望と機会」のこの結合学説がいやしくもその外一切の学説から区別さるべきであると言い得るならば、それは、その学説が機会を明瞭に分析し、翹望と機会と所得とを調和せしめるからである。所得の概念は利子論において基本的な役目を演ずるものである。私はあえて、ここに述べられたる学説が従来 of 学説を転覆するよりもむしろこれを整え、そして説明の鎖を完全かつ

原著者序言

強固ならしめる助けとなるものとして見られんことを希望する。

第1章は私の *Nature of Capital and Income* を読んだことのない読者に、その内容の簡単な概略を与える目的のもとに付け加えられたものである。

私は初めて純粹の經濟理論に関する書物の中において、数学を全く附録に移してしまふ代わりに、本文の中にこれを取入れた。これは数学の用途の増大と、数理經濟學ならびに統計學を読みこなす資格のある学生の数の増大を考慮してのことである。

第2章ならびに第19章のある部分は、その附録と共に別の形式のもとに私の單行論文 “*Appreciation and Interest*” に表われている。この單行論文の一部をそのまま用いることを許してくれた *American Economic Association* に対して感謝せねばならぬ。これは30年前に現われたものであるから、その中に表わされた意見（すなわち貨幣価値の騰貴または低落は利子歩合を引下げまたは引上げるべきものであり、またある程度までこれを行っているという意見）は著しく流通力を得ているもので、これを説明し実証するには戦時の経験をもってした。

第19章は、大部分物価と利子歩合の間に存する關係についての新しい詳細な研究より成っている。この關係は新しい嚴重な統計的分析方法によって立証されている。この分析の結果として示された結論はただ試験的なものに過ぎないが、しかもそれは、一方における利子歩合と他方における物価、景氣、銀行準備金ならびに銀行貸付金との間の關係に対する一層進んだ統計的研究に値するものだと考える。旧書を準備するに当たって、私は多数の人々から重要な援助を受けた。大蔵大臣はベーム・バヴェルク (*Böhm-Bawerk*) の利子に関する著作ならびにこの問題に関する氏の學說史は優秀なものであるが、同氏は親切にも氏の利子論に捧げられた章を通読して批評してくれた。その後氏の *Positive Theorie des Kapitals* およびこれの *Exkurse* の第3版において氏は初めて表わされたままの *The Rate of Interest* に対して可否兩様の論議ならびに批判のために100頁以上を費やした。そして第20章において私はこの批評を考慮

原著者序言

に入れた。

本書の準備中、私は合衆国および外国における多数の経済学者その他の人々から数多の暗示や援助を受けた。この人々の名前はこれを枚挙するにいとまのない程である。私の同僚 Royal Meeker 博士、Max Sasuly 博士および Benjamin P. Whitaker 氏は有益なる批判ならびに材料の収集、印刷所のための原稿整理および校正通読に寄与してくれた。私は、表現の形式ならびに方法に関して色々暗示を与えてくれたことについて、特に私の兄弟 Herbert W. Fisher 氏に、それから機会の原則に関する私の叙述に対する批評を与えてくれたことに対し Harry G. Brown 教授に感謝するものである。その他特に私を助けてくれた人々は Lionel D. Edie 教授、C.O. Hardy 氏、R.G. Hawtry 氏、Frank H. Knight 教授、J.S. Lawrence 教授、Arthur W. Marget 教授、H.B. Meek 教授、Wesley C. Mitchell 教授、Clara Eliot Raup 夫人、Henry Schultz 教授、Henry R. Seager 教授、Henry Simons 氏、Carl Snyder 氏、Jacob Viner 教授である。

私はまた、分配経済論における私の学級の諸氏すなわち Howard Berelzheimer, A.G. Buehler, Francis W. Hopkins, Richard A. Lester, Daniel T. Selko, Andrew Stevenson, Jr., および Ronald B. Welch から有益なる暗示を受けた。

エール大学 1930年

アービング・フィッシャー

目 次

原著者序言	i
第1編 総 論	1
第1章 所得と資本	3
第2章 貨幣利子と実質利子	37
第3章 若干の普通の陥穽	46
第2編 文章による理論	61
第4章 時差 (人間的翹望)	63
第5章 利子論の第1次研究	98
第6章 利子論の第2次研究	121
第7章 投資機会の原則	145
第8章 第2次研究に関する議論	170
第9章 利子論の第3次研究	195
第3編 数学的理論	215
第10章 幾何学的用語による第1次研究	217
第11章 幾何学的用語による第2次研究	243
第12章 数式的用語による第1次研究	265
第13章 数式的用語による第2次研究	278
第14章 数学的の公式化に適せざる第3次研究	292
第4編 余 論	299
第15章 経済学における利子の地位	301
第16章 利子歩合に対する発見と発明の 関係	315

第17章	個人的借入金と営業借入金	328
第18章	若干の例説的事実	343
第19章	貨幣および物価に対する利子の関係	367
第20章	反対論の考察	414
第21章	撮 要	453
第1章の附録		465
第10章の附録		466
第12章の附録		468
第13章の附録		471
第19章の附録		478
第20章の附録		491
文 献		500
あとがき		507

第1編
總 論

第1章 所得と資本¹⁾

- 1) (1906年に初めて出版された) The Nature of Capital and Income は、元来、その直後に続いて出た所の The Rate of Interest の基礎としてその用に供する目的のものであった。私は、学生が The Rate of Interest を読む前に The Nature of Capital and Income を読まんことを期待していたのであった。

けれども、今ここに私は The Nature of Capital and Income を読むために時間を割くことを欲せぬ人たちのためにこれを概括してこの第1章を書いた。私はこの機会を利用して語勢を改め直し、かつまたその後の研究によって訂正したほうが良いと考えた叙述に訂正を施した。

親切なる一批評家ジョン・ビー・カンニング教授 (John B. Canning) は、The Nature of Capital and Income は、すべからく The Nature of Income and Capital と言うべきであると注意し、また所得が資本価値の概念の基礎であり、かつ事実上経済学の最も根本的な概念であるのであるから、この主題は逆の順序で書表わされるべきであると忠告している。

私が The Nature of Capital and Income において 試みようとしたような一つのまとまった体裁の表現の中で逆の順序を用いるということは実行し難いことであつたかもしれぬが、簡潔ということを経分の独断の理由とすることのできる本章においては、私はカンニング教授の忠告を採用した。表現の様式をかくのごとく根本的に変えたことは、すでにその書を読んだことのある一部の人々を駆って、改めて、本章において用いられた逆の順序でそれを再調べするに至らしめるであろうし、また私は、その書を読んだことのない一部の人々も本章を読了した後に更に動かされ

第1編 総論

て、この The Nature of Capital and Income を詳細に読むに至らんことを希望する。とにかく本章においては、私は利子歩合の起源、性質ならびに決定要素の考察に進むための準備として最も本質的な結論にのみ私の説明を限定しようと努めたのである。

1 主観的所得あるいは享樂所得

所得とは出来事の一つの連続である。²⁾

2) 利子論における基礎的なものとして出来事という概念を用いた所の最初の著者はジョン・レー (John Rae) であったように思われる。1834年に初めて出版されたその著作については他の箇所において注釈を加えてある。

近代の相対性理論によれば、根本的の実在は、物質や電気・空間・時間・生命または精神ではなくして、出来事である。

各個人にとっては、ただただその経験の範囲内に来る所の出来事のみが直接に関係があるのである。これらの出来事——個人的精神の心理的経験——こそまさにその個人にとっての終極の所得を構成するものである。外部の出来事は、その個人にとっては、ただただそれがこれらの精神内部の出来事に対する手段であるという限りにおいてのみ意義があるのである。人間の神経系統は、ラジオと同様に一つの大きな受信機である。我々の脳髄は、我々に対して発生し、そして我々の神経系統を刺激する所の外部の出来事を、我々の心理生活の流れに変形せしめる所の役目を勤めるのである。

しかし人間の身体は従来一個の所有物として認められることなく、ただただ人体以外の所有物にその起源を発する所の意識内の出来事のみが一般に心理的所得と認められる。けれども、人的機械はその目的ある活動によって、望ましい出来事の物質的源泉であるそれ以外の諸所有物——すなわち食物、家屋その他の財貨——を産出したりはその生産を援助するのであって、その限りにおいてなお一つの役割を演じているのである。そしてこれらの所有物は、各々それぞれに、その最後の結果を我々の意識の流れの中に記録する所の一系の作用を

第1章 所得と資本

惹起するのである。この見地からして考慮すべき重要な一事は、人類が常に自然の諸原料と諸力を占有しかつこれを利用することによって、その心理生活の流れを統制せんと努力しつつあるということである。

人類歴史の初期においては、人間はその環境に対してほとんど支配力を持っておらず、一般に風雷・雨雪・寒暑等の自然力に左右されていた。しかし今日では、人間は家屋衣服および暖炉なる機械物によりこれらの自然力に対してその身を保護する。避雷針によって雷電を避け、土地占有、農場建築物、犁鋤その他の器具によってその食糧品の供給を増加し、更に水車、挽碎機、厨炉その他の手段により、はたまた自己自身をはじめ諸人の体力労働によって食糧を調製するのである。

創造および変造のこれら中間過程もはたまたこれに伴う金銭取引もそれが人間の享樂という心理的所得にとって必要または有用なる準備行為であるのであれば、なんら意義のあるものではない。かような準備行為、殊に金銭取引を観察するに当たっては、我々はこれらの取引がその職分としてすべからくもたらすべきものたるはるかに重要な享樂そのものを看過せぬように注意しなければならない。

数千の人々に所得を供給している所の取締役や支配人たちは、往々その会社を目して単に、一つの大きいなる貨幣製造機械と考えている。すなわちこれらの人たちの目から見れば、会社の一目的はその株主のために貨幣配当金、債券所有者のために貨幣利子、またその雇用人のために貨幣労銀ならびに貨幣俸給をかせぐにあるのである。そしてこれらの支払をして後にどうということが起ころうと、それは事極めて私事に関するものであって、取締役や支配人等のかかわるべきことではないとされている。けれども、これらのことは一つの手配全体の中の一小節であるのである。実際上において重要なことは、我々が市場から自分の家庭や私生活内に持って来る所のものいかにである。貨幣は、それが支弁されるまでは我々にとってなんら効用のないものである。究極の賃金は貨幣の

第1編 総 論

計数で支払われるものではなく、その金銭で購入される享樂そのもので支払われるものである。配当金小切手が究極の意味における所得となるのは、ただ我々がその小切手をもって購入する食物を食ひ、衣服を着用し、自動車を乗用する時にあるのである。

2 客觀的所得あるいは實質所得（我々の「生計」）

享樂所得の本体は心理的なものであつて、直接にこれを測ることはできない。しかし我々は、享樂所得から一步さかのぼつていわゆる實質所得なるものによつて間接にこの大体を測定することができる。實質賃金、そしてまた一般に實質所得なるものは、我々に内的享樂を与えてくれる所の外界における終局的の物質的出来事から成立つものである。この實質所得は、住宅の庇護、蓄音機またはラジオの音楽、衣服の使用、食物の摂取、新聞の購読その他すべて我々が我々の周囲の世界をして、我々の享樂に貢獻せしめるようにする所の無數の出来事を包含している。けれども我々は往々我々の「パンとバター」という言葉でこの我々の實質所得を暗示することがある。

外部的出来事の流れの中のこれらの終局的のものが、すなわち生計費とか生計を営むとかいう語句の中に含まれるいわゆる「生計」なるものである。これらの終局的の外部的出来事と、これがために生ずる内部的出来事とは密接に相並行して進むものである。否、内部的出来事はむしろ一般に時間の点において、密接に外部的出来事に追隨するものである。例えば音楽の享樂はピアノや歌手がこれを産出するとほとんど時を同じくして感ぜられ、食物の享樂は食物摂取と同時にまたはその直後に經驗せられるのである。

食物や衣服の使用等のごときこれらの外部的出来事は、測定のすこぶる困難な点においてその結果たる内部的出来事と同様である。これらの出来事は多くの家庭の秘密裡に生ずるものであつて、なんらかの標準單位でこれを表明することは困難な場合が多く、またこれを示すべき共通の尺度がない。これを經驗

第1章 所得と資本

する個人すらも自ら直接にこれを測定または量定することはできない。この点に関して個人がなし得る所は、ただその外部的出来事を得るために支払った貨幣を測ることだけである。

3 生計費、実質所得の標準

そこで、我々はさきに一個人の享樂所得からその実質所得にさかのぼったと同様に、今や更に個人の実質所得、すなわちその生計からその生計費すなわち実質所得の貨幣的測定にさかのぼっていく。食事をしている間における享樂の内部的出来事も、はたまたその食事をするという外部的出来事もドルの数でこれを測ることはできないが、しかしその食事にどれだけの貨幣を要したかは判然とこれを知ることができる。これと同様に映画館内で受ける享樂はこれを測ることができないが、その入場券に対していくらを支払ったかはこれを知ることができるし、また自分の住宅の庇護が自分にとって実際にどれだけの価値があるかは正確にこれを測ることはできないけれども、家賃としていくら支払っているか、もしまた自分自身の家屋に住んでいるとすれば家賃として支払うべき正当な代償はいくら位であるかということはこれを明言することができる。

1着の夜会服を着用することがどれ程の価値があるかはこれを算定することはできないが、1着を借用するのにどれ程の費用がかかるか、もしまたその夜会服が自身のものであるならば、その賃借の正当な料金はいか程であるかはこれを知ることができる。かような代償を算出するのは会計士の仕事である。

貨幣支払という意味におけるいわゆる総生計費なるものは一つの借方勘定の項目であって、所得というよりもむしろ支出であるが、しかしこの勘定項目こそはまさにこれらの支払の対象物たる実用所得の貸方勘定項目を測るに最も実用的な尺度であるのである。なぜかという、もし、我々が一労働者の所得を一^{ランチェ}財産生活者、すなわち少しも自ら労働することなくただ（自分自身という資本以外の）資本から得た所得のみでもって生活している人の所得と比較せんと